

町に自然をとり入れる

町がすみよいかどうかは、交通や買い物が便利といったことだけで決まるわけではありません。植物や土の地面、川などの自然をとりこむことで、快適で心やすらぐ、すみよい町になります。

植物をとり入れる

人が集まる都市部は、コンクリートで舗装された地面でおおわれ、道路をたくさんの自動車が走っています。大きなビルが建ち並び、店や娯楽施設がそなえられた建物の中だけで生活できるようなマンションもあります。夏場は外に出ると、エアコンの室外機から出る熱やコンクリートの照り返しによって、長く外にいられないほどの暑さになる場所も少なくありません。ビルからビルへの移動が生活の中心となり、交通や買い物が便利でも、住民がくらしやすい町とはいえません。

植物には、こういったすみにくさをやわらげる力があります。町に1本の木があるだけで、人はやすらぎを感じ、そこに集まってきます。人だけでなく鳥や昆虫なども集まり、そこに小さな自然が生まれます。植物の葉から水分が蒸発するときには、周囲の熱をうばって気温を下げてくれます。さらに、町の中の樹木や公園などの空間は、地震や火災などが起きたとき、火災の広がりをおさえ、避難場所としても役立ちます。



北海道札幌市では、果樹(リンゴ)を街路樹にしている。収穫期には地域の人びとにリンゴが配られる。

●自然を生かした町づくり●

住民が共同で利用する市民農園。収穫量は少ないが、都市部における食料生産の場にもなる。住民のいこいの場となる。

道にそってつくられる街路樹は、自動車の騒音をやわらげたり排気ガスにくまられる汚染物質を吸着したりする。植える種類によって実や花、紅葉など、さまざまな楽しみ方ができる。

土の地面や芝生などで緑化された地面は、太陽の熱を吸収し、すずしい空気をつくる。また、雨などを地中にしみこませる。

街路樹など、樹木の周囲は土の地面を広く残す。

落ち葉は捨てるのではなく、土の地面にもどせば肥料となる。

町のさまざまな場所にもうけられた小さな公園。住民の交流の場となる。花壇や樹木の手入れは住民がおこなう。

神社の敷地をかこむ鎮守の森は、その土地本来の樹木が残る、町に残された貴重な自然。地域の人びとの心のよりどころでもある。

ビルの屋上に樹木や草花を植える。ビル内の室温や周囲の気温を下げる。都市にくらす鳥や昆虫が集まる場所となる。

町のシンボルとなる樹木。

つる植物を窓や壁にはわせた緑のカーテンは、室内の気温を下げる。見た目もすずしくて、ゴーヤなどの野菜を植えると収穫も楽しめる。

自然公園は地域の人びとのいこいの場となる。その土地本来の樹木を植えることで小さな森となり、生き物たちのすみかともなる。災害のときは火災の広がりをふせぐとともに、避難場所となる。

●町に川を復元する●

自動車の通らない道や路地は、人びとの交流の場となる。

家の前やベランダに置かれた植木鉢やプランターは、町を美しい草花でかざる。

町の各所で雨水をためる。火災のときの消火水や植木の水やりなどに利用する。

家と道路の境を、コンクリートの塀ではなく樹木を利用した生垣にする。

川は風の通り道となり、都市の気温を下げる。人が近寄れる水辺は人びとのいこいの場となる。

韓国のソウル市では、高速道路をこわして昔の川を復元しました。空気がきれいになり、川岸は人びとでにぎわうようになりました。

こわす前の高速道路



現在のようす

